

大学における司書課程の意義について

坂本 百華（文学部文学科ドイツ文学専修）

大学生活において司書課程で得た知識と経験は、私にとってかけがえのない大切なものとなっています。大学4年間を通じて、私自身、司書課程において多くのことを学び、講座を受講した当初とは全く異なる考えを持つまでに至りました。科目履修中も、なぜ大学で司書資格を取るのか、そこにどんな意味があるのか常に考えていたように思います。私は図書館関係の仕事には就きませんが、司書課程での学びが今後どのように生きるのか、現在の自分なりの考えを綴ります。

私が司書課程で学ぶことを決めたのは、本に関わる仕事への興味と、就職先の一つとして司書という仕事を考えていたためです。しかし学習をすすめる中で、司書という専門職に対する自分の考えが甘いものであったことに気づきました。専門知識を用いて人々の知的自由を支える図書館司書の在り方は、閲覧業務が司書の仕事であるという私の認識を一新しました。

司書課程では、図書館業務に関する知識の習得のみならず、図書館がもつ社会的役割についても考えます。このことは司書という仕事を通して、自らが社会に与える影響について考える機会にもなっていました。そして1年次の図書館概論の授業で、私は図書館学の面白さに気づきました。それまで文学的イメージしか抱いていなかった図書館学に、歴史・経営・メディアといった学問分野の広がりを感じ、図書館を取り巻く世界の深さを認識しました。

授業では、指定されたテキストを読み、そこから生まれた自分の考えを記述することが課題となっていました。課題添削後には、多様な学生の思考がプリントに集約されることになっており、私は新しい発想と出会うことができるその紙を毎週楽しみにしていました。また大教室であるにもかかわらず、個々の学生の意見を先生が視覚化してくださり、学生同士で様々な意見を共有することができたことも私にとっては新鮮でした。

専門知識の学習と同時に、4年間にわたって自分の考えや人生の指針を模索することのできる司書課程は、大学内において社会との繋がりをもつ存在として学生にとって重要な役割を果たすと私は考えています。高等教育はどこか社会とかけ離れた部分があり、教授が追究する学問に学生が追随する形が主流となっているように思います。そのため、一つの分野に絞られない司書課程における学習は、社会における学びに近い形を持っているといえるのではないのでしょうか。社会に正解はなく、個々人の考えが社会をつくっていくことを実感できる場であるといえます。

一人の人間として思考し、誰かに物事を伝えるという単純作業の中にも、情報収集や様々な分野との繋がりを考慮して意見を述べること、常に物事に対し批判の視点をもつことなど多様な能力が求められます。情報収集、発信能力は司書課程において得ることができる技術的側面であり、司書課程における史学や経営論といった分野は自分の考えを掘り下げることのできる哲学的側面を備えています。図書館業務の知識という実用的な能力以上に、図書館の存在意義を考えることや、自分の社会的使命を追究するといった司書課程における哲学的・思想的側面が、大学生に与える影響は大きいと私は考えます。

私自身、相関性がないように思える物事にも繋がりがあることを知り、司書課程科目と専攻分野、その他の学問分野が自分の中で相互に影響し合っていることを意識するようになりました。また知識や経験といったものは、決して無駄になることはなく人生の様々な場面で生きるということを学び、生涯学習の重要性を実感しました。

もし司書課程における学びを知識と経験に二分するならば、図書館実習は経験にあたり、実習前の学習は知識にあたると私は考えています。社会経験ともいえる図書館実習が司書課程において果たす役割は、多大なものであると感じます。

「図書館は成長する有機体である (Library is a growing organism)」

——ランガナタン『図書館学の五法則 (The Five Laws of Library Science)』より

図書館実習前、私はこの言葉を理念として理解しているつもりでした。しかし、実際に図書館業務において利用者や図書館員など、さまざまな人々が交わり図書館を形成していく状況に身を置いて初めてこの言葉を体感しました。実習は、司書課程で断片的に学んできた知識が一つにまとまり、図書館の中でそれが具現化される様子を間近で見ることができる唯一の機会です。

専門職養成機関における司書の在り方の考えと、図書館における司書の姿がどのように異なるかを知るよい機会ともなっています。図書館というものの在り方を学問的にではなく、実務を基準に考えることができたことは私にとって大きな収穫となりました。そのため、司書課程において、実習以外にも図書館員の方々と接する時間が設けられるとよいと感じるようになりました。図書館にかかわる様々な人から刺激を受けることで、学生自身の図書館学の捉え方がより多面的なものに変わるのではないのでしょうか。司書という専門職の社会的地位について問題意識をもち、社会構造に対し疑問を抱くことができたのも、司書課程における学びと実習という機会を得たからでした。

実習先の職員の方から、図書館に関わる仕事に就かないとしても、有資格者として図書館に関心をもつことが大切であるという言葉을いただき、今後も一利用者としてだけでなく、司書課程履修者として図書館を取り巻く状況に注視していきたいという考えをもつようになりました。選択科目の充実が見られる立教大学司書課程で取得した司書資格に誇りを持ち、図書館世界の外部から、専門職としての司書の社会的地位向上を追求する動きに積極的に関わっていききたいと考えています。